

- 1.学校教育目標 一人ひとりを大切にし 知・徳・体の調和のとれた たくましく人間性豊かな児童の育成
 2.めざす子ども像 進んで学び 仲間と深め 自信をもって行動する児童の育成
 3.総括表

A・・・十分 B・・・おおむね十分 C・・・やや不十分 D・・・不十分

評価項目	考察(成果と課題)	次年度への改善点等	関係者評価
学校教育目標	<p>「学校は、学校教育目標に向かって努力している」に対して、保護者からの肯定的な回答が90%であり、教育目標の具現化に向けた取組に一定の評価を得たと考えられる。一方で「わからない」の回答が5%あり、学校教育目標の周知がさらに必要と考える。</p> <p>「楽しく学校に登校している」と肯定的に回答した保護者が91%、「学校へ来るのが楽しい」と肯定的に回答した児童が83%と、それぞれ高い水準ではあるが、昨年と比較するといずれも4ポイントの低下が見られる。児童にとって学校が安心して楽しく過ごせる居場所となるよう多面的な視点から改善を図る必要がある。</p> <p>また、「働き方改革」の保護者の認識は85%と3年間で35ポイント向上し、その認識の広がりを示している。働き方改革への理解のもと、教職員のワークライフバランス実現を目指した取組を一層推進させ、教育の質の向上につなげる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標の周知 ・多面的な視点からの改善 ・働き方改革の推進 	A
地域・家庭との連携	<p>「学校は、地域と家庭と力を合わせて、子どもの教育を進めている」に対して、保護者からの肯定的な回答が90%であった。コロナ禍において今年度も教育活動の制限が余儀なくされたが、感染症対策を積極的に取り入れた運動会を中心に、制限された中で教育活動を積み重ねてきたことが評価につながったと考えられる。今後の家庭・地域連携については、次年度導入されるコミュニティ・スクールの取組を積極的に生かしていく。</p> <p>また、「懇談、学級だより、HPによる連携・情報発信」においても88%の肯定的な回答を得ているが、昨年度より2ポイント低下した。HPのリニューアル作業に時間がかかり、更新ができなかったことが要因の一つと考える。「行事への参加・担任との連携」においては、肯定的な回答が昨年と同様86%であり、今後もコロナ禍における連携の在り方を検討していく必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍における地域に開かれた教育課程の実施(C・Sの有効活用) ・配布文書、メール、HP等の情報発信の充実 	A
学力向上	<p>「学校は、学力向上を目指して指導している」に対して、保護者からの肯定的な回答は86%であり、昨年度より4ポイント低下している。GIGAスクール構想によるタブレット端末の活用において、その期待の大きさが要因の一つとしてあげられる。学校としては、ハード面・ソフト面において、その整備が整いつつある中で、教育的な効果を上げられるよう努力を続けているところである。今後も、学力向上のツールとしてタブレット端末の活用を積極的に行っていく。</p> <p>学力向上実行プランに基づいた実践に関する肯定的な回答は、「課題に進んで取り組む」82%、「ペア・グループでの学習が好き」90%といずれも昨年とほぼ同様の割合を示した。今年度は、高学年を中心に鳴門教育大学と連携し、考えを深め合うグループ学習を取り入れながら授業改善に臨んだ。そのことが、主体的に課題に向き合ったり、ともに学び合う姿勢を高めたりすることに大きく結びついている。この成果を生かして、肯定的な回答が58%にとどまっている「自分の考えを発表できる」児童の育成につなげていきたい。</p> <p>家庭で「学習習慣が身につくような働きかけをしているか」については、肯定的な回答が昨年同様80%であり、約2割の家庭では、サポートが難しい状況にある。このことは、児童の「忘れ物をせず、学習の準備ができる」の肯定的回答77%であることにもつながっていると考えられる。学力の向上を支えるためには家庭とのさらなる連携が欠かせないため、より積極的な啓発を進めていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・GIGAスクール構想におけるタブレットの有効活用 ・学力向上実行プランの改善と実践の充実 ・家庭学習のサポート 	A
体力向上	<p>「学校は、体力向上を目指して指導している」に対して、保護者から肯定的な回答が88%と昨年同等9割を切った。今年度も、水泳や陸上の大会中止に伴い、放課後の体育指導も中止となったことがその大きな要因と考える。また、「休み時間は外で遊んでいる」に対して否定的に回答した児童が10%と昨年より8ポイント増加している。コロナ禍において、運動を好む児童と好まない児童の二極化傾向がやや見られる。そのような中、6年生を中心とした全校オリンピックは、どの活動も運動を楽しむ児童の姿が見られた。今後も、体育を中心に行事も工夫しながら運動の楽しさを味わう機会を確保していく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍における体力向上の推進 	B

評価項目	考察(成果と課題)	次年度への改善点等	関係者評価
人権 心の教育	<p>「学校は、人権を尊重する意識や態度を育てようとしている」「教師は、子どもたちの悩みや相談に親身に対応している」に対して、保護者からの肯定的な回答はそれぞれ86%、87%であった。「親身に対応」においては、昨年度より3ポイントの向上が見られた。常に児童や保護者の想いに寄り添う姿勢を大切にした教育活動を行ってきたことが成果につながったと考える。</p> <p>一方で児童は、「先生は、話を聞いてくれたり、まがかったことをしたらきちんと注意してくれたりする」に対して肯定的な回答が86%と昨年度より6ポイント低下している。「きちんと注意」という部分において、今年度は、生徒指導上の課題解決に時間を要しており、そのことに対する影響が大きいと思われる。「きちんと注意」以上に「悩みや相談に親身に対応」という教師と児童との信頼関係構築していくことが困難な課題を解決をしていく近道だと信じて、今後も真摯に対応を続けていく。特に、現在実践を進めているポジティブな行動支援（SWPBS）を教師の基本姿勢として深化させていく。</p> <p>また、児童は、「友達を大切にできている」「いじめや差別のない学校にしようとしている」に対して、肯定的な回答がそれぞれ94%、87%と高く、よりよい学級にしていこうする意欲の高さが表れている。しかし、「自分にはよいところがある」に対する肯定的な回答は77%にとどまっており、昨年度より4ポイント低下している。コロナ禍である今だからこそ、教師と児童、児童と児童のつながりを強くし、自らが一人の人間として大切にされているという実感をもつことができる取組を今後も強化していく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 児童や保護者との信頼関係をベースとした学級づくり ポジティブな行動支援（SWPBS）の実践 児童の自己肯定感を高める取組 	A
（生徒指導・道徳）	<p>「学校は、道徳心や社会のきまりを守る意識を育てようとしている」に対して保護者の肯定的な回答は81%で、昨年度を9ポイント下回っている。児童においても「きまりを守って生活できているか」について、肯定的な回答が87%と6ポイント低下している。昨年度は、新しい生活様式を定着させ、感染防止の意識を高めてきたことは、結果として児童の規範意識を高める相乗効果を生み出したと考えられた。しかし、「規範意識」と「心の問題」は、強く結びついており、先に述べたように、信頼関係をベースにした中で、規範意識を高められるよう、関係機関と連携を図りながら取組を進めていく。</p> <p>「あいさつができていないか」については、肯定的な回答が児童87%、保護者77%であり、いずれも昨年度より低下傾向にある。家庭での取組においては、7ポイントの低下であった。家庭における基本的な生活習慣の確立に向けた取組を啓発していきたい。学校においてもポジティブな行動支援の実践とかかわりをもたせ、より効果的な指導を今後も行っていく。</p> <p>「進んで家の手伝いや自分でできる役割をしている」に対して、肯定的な回答が68%で昨年と同様7割程度にとどまっている。家族の一員としてその役割を果たす機会がもてるよう、学校での指導にあわせて、家庭への啓発をさらに行っていく必要がある。</p> <p>「目標をもって生活することができている」に対して肯定的に回答した児童は80%であり昨年と同様であるが、「そう思わない」の回答が1%に減少した。鳴門教育大学との連携により、授業や行事等で「めあての設定」や「ふり返り」を継続的に取り入れる実践を継続したことが成果としてうかがえる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 関係機関との連携 SWPBSの実践 家庭への啓発 鳴教大との連携 	A
安全教育	<p>「学校は、交通安全や災害から身を守る姿勢や知識など、安全教育に力を入れているか」について、保護者の肯定的な回答は89%であり、昨年とほぼ同様である。「地震や火事、不審者が現れたときなどに、どうやって逃げたらいいかかわかってる」とした回答が97%であり、継続して取り組んでいる教育効果の表れと考えられる。今年度は、大雨、コロナ対応による児童引き渡し、参観日当日の地震による避難があり、今までの訓練を実際の場面で生かすことができた。今後も消防等の関係機関と連携を図り、さらに取組の内容を改善しながら充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 関係機関との連携 コロナ禍における安全教育の推進 	A

4. 学校評議員からのご意見

- ・校長先生を中心にして、職員が一丸となり、教育目標に向かって子どもたちや保護者、地域ののちを思い、真摯に取組ができていると思った。今後も一層の取組を期待している。
- ・アンケートの結果から「自己肯定感」の回答結果が気になった。コロナ禍で、子どもたちがしたいことを十分させてあげられないことや感染拡大防止のため、子どもたちの行為を注視してしまいがちになってしまう。そして、行事等の中止などで自信をつける機会が減ったことも影響しているのではないかと思う。こうした子どもたちの変化に気づき、ふり返るために、このアンケートの大切さをいつもの年以上に痛感した。保護者として、より一層子どもたちの頑張りに気づき、勇気づけていけるようにしていきたいと思う。
- ・コロナ感染は、どこで起こってもおかしくない状況で、たまたまこの地域で起こってしまったと思うし、検査していないところでたくさんの方が感染している状況だと思う。
- ・コロナ禍という環境においても、安全・安心に配慮いただいた上で、工夫を凝らした授業づくりや行事計画など先生方には子どもを第一に考え、十分ご尽力いただいていると感じる。また、参観日当日に起こった地震に対し、スムーズな対応をいただいた先生方はもちろんだが、子どもたちも冷静に行動できたことに、日頃からの安全教育が徹底されていることを実感した。